

「つながる・ひろがる ボランティアと地域の絆」

2011年11月20日(日) 福井県福井市 福井新聞社「風の森ホール」

主催: 全日本社会貢献団体機構/福井新聞社/全国地方新聞社連合会

後援: 福井県/福井県教育委員会/NHK福井放送局/共同通信社/全日本遊技事業協同組合連合会/福井県遊技業協同組合

全日本社会貢献団体機構(AJOSC)の活動の柱のひとつである社会貢献フォーラムが、2011年11月20日、北陸地方で初めて福井県福井市・福井新聞社「風の森ホール」で開催された。今回のテーマは、「つながる・ひろがる ボランティアと地域の絆」。未曾有の災害となった東日本大震災を機に、ボランティアの意義や価値があらためて見直されるとともに、被害を受けた地域の復興に欠かせないものとして、“絆”にスポットが当たっている状況の中で、まさに時代の潮流を考えるテーマとなった。フォーラムでは、第一部で気象予報士の半井小絵さんによる講演、第二部で4名の有識者によるパネルディスカッションが行われた。

ボランティアを象徴する福井でのフォーラム。

福井市にある福井新聞社・風の森ホールで開かれた今回のフォーラムには、約230名の参加者が詰めかけた。日ごろ、ボランティアや社会貢献活動に取り組んでいる方々が大半と思っていたのだが、事務局によれば、参加者の多くは一般の方々だという。それだけ、ボランティアや社会貢献活動に対する福井県民の関心が高まってきていることを物語っている。

第二部のパネルディスカッションでも、しばしば話に出たが、福井県は日本におけるボランティア活動を語るうえで象徴的なところである。1997年1月の「ナホトカ号重油流出事故」では、地元住民に加え、全国各地から数多くのボランティアが駆けつけ、海岸の重油回収作業が続けられた。また、2004年7月に大規模な浸水被害を引き起こした福井豪雨のさいにも、復旧活動などにボランティアの活躍が見られた。こうしたことなどが、福井県におけるボランティアや社会貢献活動への関心の高さの背景となっていると推測される。

フォーラムは、主催者を代表し、福井新聞社 執行役員 営業局長 山本道隆さんによるテーマとパネリストの紹介、AJOSCの設立経緯の説明に続き、「ボランティアや社会貢献活動の役割と可能性について一層のご理解を深め、今後の市民活動やコミュニティづくりに役立てていただきたい」というあいさつで始まった。

いかに自分のこととして考えるかが大切。

第一部の講演には、「気象災害と防災への心がまえ」というテーマで、NHKお天気キャスターとして活躍した気象予報士の半井小絵さんが講師として登場。NHKの

気象ニュースでは、解説や画面内容をすべてお天気キャスターが構成していること、解説ポイントはなるべくひとつに絞り込んでわかりやすく伝えるよう心がけたことなど、生放送ゆえの時間調節の難しさや失敗談などを交え、興味深いお話がうかがえた。

さらに、東日本大震災後の6月、津波による被害が甚大だった岩手県を訪ね、避難所や仮設住宅で、被災者と一緒にタオルで象を作るボランティアに参加した様子が披露された。「印象的だったのは、地元の住民のみなさんが、「まさかこんなことになるとは思わなかった」と、口をそろえて言っていたことでした。これまでの地震や気象災害でも、避難勧告が出てほしいことは起こらなかった。だから『今回も大丈夫』『自分は大丈夫』と、多くの方が思ったと言います。避難して、何もなければ、次は避難しなくてもいいと思いがちですが、『逃げたけど、何もなくてよかった』と心を切り替えてほしいと思います」。

そのうえで、気象災害から身を守るために必要なこととして、早め早めに避難すること、危険な場所(増水した川、地盤が緩んでいる急な斜面、浸水のおそれのある低い土地、高波の打ち寄せる海など)に近づかないことといったポイントが紹介された。「災害時には、人ごとではなく、いかに自分のこととして考えるかが大切です。自分は大丈夫だと思わないこと、人間は自然に勝てないのだから想定外のことが起こるのは当たり前だということを肝に銘じてほしいと思います」

最後にこう話し、半井さんはお話を結んだ。

ボランティアの本質は横に立つこと。

休憩をはさんだ第二部では、「つながる・ひろがる ボランティアと地域の絆」をテーマに、アナウンサーの村松真貴子さんをコーディネーターとするパネルディスカッションが行われた。まず、早稲田大学 教授の鳥越皓之さんが、「ボランティア・社会貢献活動が果たす役割」という内容で、討論テーマの設定を行った。

鳥越さんは、3月11日に大震災が起きた直後、ボランティアの機運が盛り上がるなか、当初、マスコミには「自重しなさい」という論調が強かったことを奇異に感じたと言う。自身が阪神淡路大震災で被災し、そのときに、仲



出席者プロフィール



半井小絵さん
(気象予報士・元NHKお天気キャスター)
兵庫県生まれ。日本銀行在職中の2001年3月、気象予報士の資格取得。04年から7年間、NHK「ニュース7」(月～金)の気象情報を担当。NPO法人「気象キャスターネットワーク」正会員。日本災害情報学会会員。気象や防災、環境に関する講演活動、子どもたちを対象とした環境教育などを行っている。



鳥越皓之さん
(早稲田大学 人間科学学術院 教授)
1944年、沖縄県生まれ。関西学院大学社会学部教授、筑波大学大学院人文社会科学部教授を経て、2005年4月から現職。大学では社会学や民俗学を担当するほか、行政や住民リーダーなどと地域づくり、NPO、コミュニティのあり方などについて研究している。「サザエさんのコミュニティの法則」「地域自治会の研究」など、著書多数。



加藤英彦さん
(福井県遊技業協同組合 理事長)
1954年、福井県生まれ。77年、東京理科大学を卒業。会社員勤めの後、福井県に戻り家業を継承。2001年4月から福井県遊技業協同組合理事長を務める。また、社団法人福井県防犯協会副理事長なども歴任し、地域の安全・防犯活動にも携わる。



奥田康一郎さん
(福井新聞社 社会部記者)
1971年、福井県生まれ。94年、福井新聞入社。報道部、経済部、社会部などを経て、2009年から「コウノトリ支局」支局長。コウノトリをめぐる県内外の動きを追うとともに、支局を拠点に環境問題や里山の価値、地域づくりなどを取材。「生きものたちのSOS」「里山発 命の環」などの連載企画を担当。



村松真貴子さん
(アナウンサー・エッセイスト)
東京都生まれ。武蔵大学人文学部を卒業。SBS静岡放送で「テレビタリ」のキャスターを務めた後、NHKで「イブニングネットワーク」「こんにちは!6けん」などの番組を担当。「NHK学園」「NHK文化センター」講師のほか、子どもたちへの読み聞かせのボランティアもしている。

間が大阪や京都から歩いてボランティアに来てくれたことが涙が出るほどうれしかったという経験を話されたうえで、「ボランティアの本質は横に立つこと、そこにいくことだ」と強調された。

また、最近の町づくり運動などを例に出し、「成長・開発」の時代から、「成熟化・定常化」の時代に入り始めたこと、それが3月11日以降の社会状況の中で、さらに加速されたように感じること、「成熟化・定常化」の時代においては、国家の役割よりも地方自治体・コミュニティ・NPOなどの役割が大きくなり、子どもや高齢者や障がい者を含めたみんなの生活の充実や不安の除去が新たな経済刺激策となりえることなどが挙げられ、最後に次のようにまとめられた。

「小さなボランティア活動がネットワークとなって広がる時代に突入した。それが地域に絆を生みだす。さまざまな地域を回ってみた私の体験上、地域の絆を測るバロメーターとなるのが、環境が整備されているか、住民に笑顔が多いか、この2点です」

福井県内での社会貢献活動の事例紹介。

続いて、福井県遊技業協同組合 理事長の加藤英彦

さん、福井新聞社 社会部記者の奥田康一郎さんによる福井県内での社会貢献活動の事例発表があった。まず、加藤理事長からは、組合全体で年間50件ほどの活動に取り組んでいるという報告がなされ、実例として①岩手県陸前高田市への運搬車両やチェーンソーなどの寄付②福島県の中学生への部活動関連用具などの寄付③2010年日本APECのエネルギー大臣会合前の道路清掃④缶飲料プルトップ回収による車椅子寄付⑤端玉お菓子の寄贈⑥震災孤児を継続的に支援するボランティアキャンペーンなどが紹介された。

「特に端玉お菓子の寄贈は、毎月1回ほど、ホールの従業員が幼稚園、保育園、社会福祉施設などを回り、直に手渡している。これが大好評で、子どもたちからお礼の絵や手紙をいただくのが実にうれしい」と、加藤理事長。

また、奥田さんは福井新聞社が展開している「みらいつなぐ・ふくい」キャンペーンを紹介した。これは、未来を担う子どもたちのために、かつて県内にも生息していたコウノトリが再び住めるような自然や暮らしを取り戻すとともに、人と人・暮らし・いのち（生態系）の3つのつながりを強めていこうというもので、越前市曾原町に「コウノトリ支局」を開設し、そこを拠点に記者がさまざまなこ



お菓子の寄贈活動に対する、子どもたちからお礼の手紙を紹介する加藤理事長。

とを体験し、それを記事にしていこうという取り組みを行っている。また、「水辺と生き物を守る農家と市民の会」や「サクラマス・レストレーション」による自然環境保護のボランティア活動が紹介された。「こうした活動が地元住民や行政を動かし、さらに、そこに子どもたちが参加するようになったことでつながりや広がりが生まれてきた」と、奥田さんは確かな手ごたえを口にした。

地域の絆づくりに貢献するボランティア。

討論では、ボランティア活動を通じて感じたことや、人と地域の変化について、各パネリストから積極的に意見が出された。

「被災された方々と一緒にタオルで象を作っていると、みなさんが段々と笑顔や元気を取り戻していく。『ありがとうね』と声をかけられたことで、逆にこちらが励まされ、人間の底力や人と人との絆を感じて帰ってきました」（半井さん）。

「お菓子を受け取るときに、子どもたちの目が輝く。それを目の当たりにして、こちらの気持ちが実に安らぐ。また、清掃活動は地味なことですが、やった後の爽快感が何とも言えない。活動を継続しながら、こうした安らぎや爽快感をいかに周囲に伝えていくかが大事だと思います」（加藤さん）。

「自然や環境保護の活動は、信念を持って続けることで、地域が変わりつつあることを実感できる。目先の利益ではなく、子や孫の世代のために、長いスパンで考えていきたい」（奥田さん）。

「今回の大震災を受けて、文部科学省では復興教育の必要性を掲げましたが、その基本となるのは『地域の絆』。まさに今日のフォーラムとテーマが合致している。市場経済では自らの利益が優先されるが、相手の利益をうれしいと思えるのが、家族とコミュニティの場合。この2つが崩壊の危機に瀕しているいまだからこそ、ボランティアや社会貢献活動を行うことに意味がある。今日は、その具体例をうかがうことができ、関係者に感謝しています」（鳥越さん）。

最後に、AJOSCの松尾守人理事があいさつに立った。コーディネーター、パネリスト、会場参加者に感謝の言葉を述べるとともに、2回開催予定だったフォーラムを1回に



し、その分の予算をあしなが育英会へ寄託したという報告があった。また、「震災復興はもとより、社会のさまざまな問題を解決し、地域で助け合いの輪を作っていくためにはボランティアの活動が不可欠である」という力強い言葉でフォーラムは締めくくられた。

継続的な人的活動が今後の業界のボランティア活動にとっての課題です。

福井県遊技業協同組合 理事長
加藤英彦さん

今回のフォーラムに参加して、日本の社会は成長から成熟へと確実に流れが変わってきたという印象を強く受けました。そうした流れに、業界として、どう歩調を合わせていくかが問われています。これまでは、えてして金銭の寄付をしておけばいいという考え方でしたが、これからはそれに加え、いかに人的活動に取り組んでいくかがポイントになると思います。

そのためには、地道なこと、身の丈にあったことなので、継続的な活動をする必要があります。当組合では、今後、震災孤児を支援するための基金を立ち上げるとともに、自分たちも被災地に向いて支援活動をしたいと考えています。火事と葬儀には地域のすべての人が協力するというのが、いわば日本人のボランティア精神の原点。そうした精神を忘れず、地方からボランティア活動の輪を広げていきたいと考えています。